

II 漂泊を生きる

この文章はもともと、「漂泊詩人、死を生きる——放哉、山頭火、金サッカを考える」という題で書こうとしたものである。近代の日本で漂泊詩人として知られる尾崎放哉（一八八五—一九二六年）や種田山頭火（一八八二—一九四〇年）はどう生きたのか、そして朝鮮の漂泊詩人として知られる金サッカ（金笠、一八〇七—一八六三年）はどう生きたのかを書いてみたいと思ったからである。そこでは放浪するとはどんなことか、孤独とは何か、そして死を生きるとは、そして詩作の意味は、といった命題について考えてみたかった。

一 漂泊とは

若いころからだと言っただけでよいと思うが、私はいつも「漂泊」することを考えていたはずである。漂泊とは、さ迷う、旅をする、放浪するという意味を含んでいるが、大学三年生のときにガリ版刷りで出した詩集『旅路』の副題は「生きるとは悲しみに耐えること」だった。私にとって旅をするというのは何かを求めて、悲しみを抱えてさ迷うことだったと思う。そしてそれは後期高齢者となつた今も続いている。いつも思うことだが、日本では伝統的に漂泊詩人といったものの人気が高い。西行、一休、芭蕉、良寛、それに近いところでは尾崎放哉や種田山頭火である。これらは生きる上での苦痛や孤独、そして修行や信仰などに関わるものだと言っただけでよいが、究極的にはどのように死を迎えるのかという問題につながる旅路である。ちなみに渡辺利夫著の『放哉と山頭火』（ちくま文庫、二〇一五年）という本があるが、その書名の副題は「死を生きる」となっている。この題名・副題に惹かれて本を読み始め、それがいつの間にか、放哉や山頭火、そして朝鮮の金サッカについて少しまとめて書いてみたいと思ったのである。放哉は「つくづく淋しい」と言い、山頭火は「何でこんなに淋しい」と嘆き、深い孤独を酒で紛らわしながら迫り来る最期を鋭利に見つめようとし、死に対する覚悟といったものを清澄な自由律俳句に昇華させようとしたと考えてよい。「漂泊詩人」と言えば聞こえはいいし、また自由律俳句と言えば、感情の自由な律動の表現に重きを置き、ときに時空の一瞬を切り取って写し出すのがその極みであるとも言えようが、放哉にしろ、山頭火にしろ、その実態は他人への甘えから抜けきらない「乞食詩人」という側面を色濃くもっていたようである。ただここで放哉や山頭火などについて書くといつても、その根本は放哉や山頭火の生活や思想、生き方を知ることを通じて自分自身の内面のありように接近してみたいということである。人は誰でも、孤独で孤立し、あれこれとさ迷いながら人生を過ごすものであるが、私の場合はどうなのかということ放哉や山頭火、金サッカを通して考えてみたいのである。「人生、こんなもの」といった悟りめいたものというか、諦めというか、ひとつの人生観といったものが持てればいいのか、

あるが、まだまだその域には達していないし、達する見込みもない。その点、自分の内面の葛藤や苦しみ、言ってみれば自分の弱さといったものを表出することによって、そういったことはそう安易にすべきではないと戒められることにもなるが、それはそれでやむを得ないことではないかと、私は思っている。

「旅」という言葉を考えてみると、普通は開放感といったものとながると思う。異世界を旅すると、自分が暮らす日常が世界に拡がる可能性の一つに過ぎないことがわかり、あらためて「生きる」ことの新鮮さを知ることにもなる。しかしそれでも実は、俳句と漂泊、旅の関係についていつもよくわからない気持ちをもっていたが、たまたま雑誌『俳句』（角川文化振興財団、二〇二二年三月号）に〈特別対談〉高橋睦郎×小澤實「俳句にとって旅とは何か」があり、教えられるところが多かった。俳句のみならず、日本の詩歌の根底にある旅のころろについて議論しているが、日本の歌人や俳諧師は伝統的に旅を大切にしてきた。漂泊と定住、たとえば松尾芭蕉もそうであるが、そのもとには日本文学が成立する遙か以前の、大陸から、海洋から、何波にも亘って渡来してきた漂泊の遠い記憶が無意識のうちにあるのではないかという。日本人は固有の単一民族ではなく、もともとはいろいろな土地から流れ着いた難民で、これこそが旅人の原型である。「旅」とは何か、いろいろな語源説があるが、柳田國男の「結（た）べ結（た）べ」説がもっとも説得力があり、結べ物〓食べ物を下さいということ。だから旅の原型は乞食業、乞食の所業、食べ物を請うこと。請うて貰えるというが、貰えなければ密かに盗む、窃盗である。さらには、強（したた）かに奪う、強奪。これが極まっ

たものが戦争である。だから、戦争は旅、征旅ということになり、戦争の前線に立つ兵士はつねに死を覚悟している。旅は本来、こうして死を覚悟したものである。

なるほど、死の覚悟。それが旅であり、そこに詩歌が生まれる。芭蕉は「野ざらしを心に嵐のしむ身かな」と詠った。旅の途中、野たれ死にして、白骨になるかも知れないが、それを覚悟して長旅に出ようとすると、折からの秋風がことさら身にしみてわびしい、ということ。やむにやまれざる必然、必要の旅だし、死を覚悟して、である。生きることをさまざまに表現した社会学者の見田宗介（真木悠介）は、二〇二二年四月に亡くなったが、その著『気流の鳴る音』（岩波書店、二〇二二年）で芭蕉についてこんなことを言っている。芭蕉は松島を目指して四十日余りの旅をし、数々の名句を生む。しかし松島では一夜を明かしたのみで、『奥の細道』に一句も残していない。松島はただ芭蕉の旅に方向を与えただけである。芭蕉の旅の意味は「目的地」に外在するのではなく、「奥の細道」そのものに内在していた。松島がもし美しくなかったとしても、あるいは松島にたどり着く前に病に倒れたとしても、芭蕉は残念には思うだろうが、それまでの旅が空虚だったとは思わないだろう。旅はそれ自体として充実していたからだ、と。芭蕉は実際には、大阪で客死するが、このように考えると、人は自分の歩いている道、過ごしている日々をきちんと生きて行くことがどんなに大事なことが理解しやすくなり、その意味で、放哉や山頭火のことをよく理解する必要があるし、朝鮮で言えば、朝鮮王朝後期の放浪の諷刺詩人とされる金サッカの生き方についてきちんと学んでみなければいけないのではないかという気がする。

ここでひとつ書いておくと、放浪と言えば、松本清張の映画『砂の器』に出てくる親子の放浪場面を思い出す。主人公はハンセン病発病以後、まだ幼かった息子をつれ、巡礼姿で北日本の海岸一帯を二年間さま迷う。これは自己の業病をなおすために、信仰をかねて遍路姿で放浪していたことと考えられるが、ついに島根県で優しくて親切な巡査によって助けられるという映画の一場面である。何回観ても涙を誘う清張作品の感動的な画面である。親と子の「宿命」だけは永遠のものであるということを通路という旅の形で見事に描いたものであると言えよう。

二 放哉と山頭火

尾崎放哉と種田山頭火を較べてみると、たぶん山頭火について書いた評論や研究書などがずっと多いだろうが、私はいちおう次のような本を読んでみた。先にあげた渡辺利夫『放哉と山頭火——死を生きる』以外に、放哉については荻原井泉水『放哉という男』（大法輪閣、一九九二年）、吉村昭『新装版 海も暮れきる』（講談社文庫、二〇一一年）、山頭火については山頭火『行乞記』（『あの山越えて 行乞記』『死を前にして歩く 行乞記』）春陽堂書店、一九七九年）、荻原井泉水・伊藤完吾編『山頭火を語る』（潮文社、一九七二年）、首藤保『種田山頭火論』（A文学会、二〇一七年）、村上護『山頭火放浪記——漂泊の俳人』（新書館、一九八一年）、である。もちろん放哉と山頭火の句集を折に触れて読んでもみた。荻原井泉水（一八八四—一九七六年）というのは、日本の自由律俳句の俳人・俳論家で、

自由律俳句の俳誌『層雲』を主宰し、放哉や山頭火を育てた師である。

これらの本に出てくる放哉と山頭火に関わるキーワードをあげてみると、「孤独・寂しさ」、「酒」、「漂泊・放浪・遍路」、「乞食・行乞」、「俳句」、「禅・仏教」、「人生・苦しみ」、「死・自殺」、「母・妻」、「庵」などで、すべて自分の生きざま・生き方に関わった言葉である。

尾崎放哉は鳥取県出身、父は鳥取地方裁判所書記。一九〇二年に上京して第一高等学校に入学、翌年一高俳句会に参加して一級上級生の荻原井泉水に出会う。東京帝国大学法学部に入るが、癖のある性格で、学友たちともそりが合わなかったという。在学中に放哉の号を用いて投句を始める。卒業後、東洋生命保険に就職し、二六歳のとき、馨、当時一九歳と結婚。大阪支店次長を務めるなど出世コースを進み、裕福な生活を送るが、人間関係に悩み、厭世の気分を深めて酒を飲むとよく暴れ、周囲を困らせた。東京本社帰任後、酒癖の悪さを理由に降格、辞職にいたる。友人の助けで朝鮮火災海上保険支配人として京城に赴くが、肋膜炎を病み、再び酒癖の悪さを理由に免職される。再起を期して満州に赴くが、病状の悪化で大連から長崎に行き、従弟宅に仮寓する。やがてそれまでの生活を捨て、妻を置いてひとり、無所有を信条とする京都の一燈園に住まい、俳句三昧の生活に入る。その後、寺男で糊口（ここう）をしのぎながら、最後は小豆島の庵寺で極貧の中、ただひたすら自然と一体となる安住の日を待ちながら俳句を作る人生を送った。周囲とのトラブルが絶えなかったが、俳句仲間の援助を受けながら、膨大な数の句を紡ぐ。季語を含まず、五・七・五の定型に縛られない自由律俳句の代表的俳人として名をなし、「咳をしても一人」などの句で知られる。身